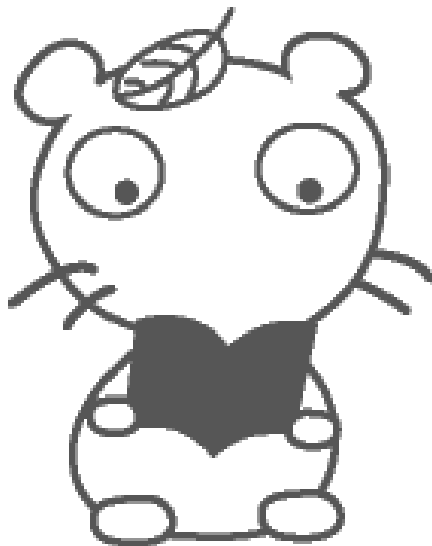


第十八回 小中学生

ふるさとの詩

入賞作品集



羽生市

第十八回 小中学生「ふるさとの詩」

入賞作品集 目次

◎ 小学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 野球がつないでくれたこと

角田 力飛 羽生南小学校 四年

宮澤章二賞 おりん

篠崎 雅光 手子林小学校 二年

優秀賞 通学路

小澤 うた 三田ヶ谷小学校 六年

「夏の日」

吉田 千紘 井泉小学校 四年

さんぽみち

吉田 智香 井泉小学校 一年

奨励賞 かわっていくぼくの住む町

江原 清真 須影小学校 五年

あいのまち

佐久間 祐子 村君小学校 六年

大好きな野球

高渕 遥斗 三田ヶ谷小学校 四年

うちのおもち

萩原 実和子 三田ヶ谷小学校 二年

ねこのしっぽ

矢吹 優 羽生南小学校 三年

その他の良い作品

11

◎ 中学生の部（五十音順）

太田玉茗賞 母の運転

西野 嘉人

東中学校

一年

12

宮澤章二賞 僕の頂

関根 伶

南中学校

一年

13

優秀賞 祖母が教えてくれた事

古溝 将大

南中学校

一年

14

曾祖母と私の夢

古谷 美結

西中学校

三年

15

私の相棒

森田 有紀

西中学校

二年

16

奨励賞 弾んで 響く ボールの音

関根 琉聖

西中学校

一年

17

祖父と手打ちそば

野村 健太

西中学校

一年

18

真夏の大激闘

蓮見 日菜乃

東中学校

一年

19

桜とともに

福田 彩陽

南中学校

三年

20

二つのふるさと

横山 遼斗

西中学校

二年

21

その他の良い作品

22

◎小学生の部

太田玉茗賞

野球が見つないでくれたこと

羽生南小学校 四年

角田 力飛

ぼくは野球が好き

観るのも好き

プレーするのも好き

高校野球も好き

プロ野球も好き

野球のことなら 何でも大好き

今年少年野球のチームに入った

練習は大変だけど とても楽しい

ヒットを打つと

仲間がよろこんでくれる

失敗しても

「ドンマイ」と言っ

仲間がはげましてくれる

落ち込んでいるひまなんてない

チームのためにがんばるんだ

仲間っていいなあ

どんな時も近くで支え はげましてくれる

家の庭で野球の練習をしていると

色々な人が声をかけてくれる

「がんばってるね」

そう言われると ぼくは力がわいてくる

近所のお兄さんが

昔使っていたグローブをゆずってくれた

それを今 ぼくが大切に使っている

ぼくは野球を通して

色々な人とつながることができた

かんとく コーチ チームメイト

練習を手伝ってくれるお父さん方

やさしく見守ってくれるお母さん方

みんながいてくれるから

ぼくは野球ができるんだ

この先 どんな出会いがあるのだろうか

考えただけで

ぼくのワクワクは止まらない

宮澤章二賞

おりん

手子林小学校 二年

篠崎 雅光

チーン おりんをならして ぼくはお父さんに「おはよう」という

チーン おりんをならして ぼくはお父さんに「おやすみ」をいう

ぼくにとつておりんの音はお父さんと話すときの音だ

ぼくのお父さんは天国にいる

だからぼくが話しかけても へんじはない へんじはなくても ぼくの声はお父さんに

聞こえていると、おぼうさんがいつていた へんじはなくても お父さんはぼくのことを

見ていると お母さんがいつていた だからぼくはお父さんとたくさん話したい

お父さんに見ていてほしい
チーン はがぬけたよ

チーン 算数で百点をとったよ

チーン せがのびたよ

たくさん たくさん 話しかける

聞こえているとしんじて

見てくれているとしんじて

チーン おりんをならして今日もぼくはお

父さんに「おはよう」という

チーン おりんをならして今日もぼくはお

父さんに「おやすみ」をいう

優秀賞

通学路

三田ヶ谷小学校 六年

小澤 うた

この道を歩くのもあとわずか

この道には色々な思い出がある

初めて学校まで歩いたのは

六さいのころ

父と母と妹たちと

真新しいランドセルを背負って

家族みんなで歩いたからか

あまり遠く感じなかった

初めて通学はんのみんなど歩いた日

上級生の歩く速さにとまどった

一生けん命歩いた

学校までとても遠く感じた

それからいろんな日々があった

と中で忘れ物に気づいた日

つがいのきじを見た日

かさがないのに急に雨が降り出した日

笑い過ぎておなかがいたくなかった日

けんかして泣きながら帰った日

仲なおりをしてほっとした日

いろんな日があるから

今では遠く感じない

好きな景色もたくさんある

橋の近くにある桜

緑のなえがサワサワゆれる田んぼ

カラッとした空気ときんもくせいの木

雲一つない日に見える富士山

この道を歩くのもあとわずか

このあとわずかを大切に

今日も歩いて行こう

「夏の日」

羽生の野道を歩いてゆく。

井泉小学校 四年

吉田 千紘

どこまでもつづく大空に

まっ白な絵の具でかいた入道雲

青い夏空が羽生の空いつぱいに広がっている

羽生のすんだ、夏の風が、

トンボたちを運んで来る。

わたしはあせびっしよりかいているのに

トンボたちははずしそう。

わたしの前を横切ったさっきのトンボが、

田んぼのいねのほ先にとまっている。

トンボが前あしで、

自分の目のまわりをつるんとなでた。

はねをたたんでひと休み。

「こんにちは、いい日だね。」

わたしはトンボに話しかけた。

トンボはなんにも言わないが、

わたしにはわかる。

トンボもそう思っているって。

わたしはなんとも言えない幸せな気持ちで、

さんぽみち

井泉小学校 一年

吉田 智香

「パパ、あれなんてせみ。」

「あれ、あれはあぶらぜみ。」

「じいー。」

「あついね。」

「あついね。」

パパとてをつないで、おねいちゃんと、ま
まと4にんではにゅうのみちをおさんぽする。

さっきのあぶらぜみのなきごえが

だんだんちいさくなりながらずっとみんなの
あとをついてくる。

なんだかわたしはうれしくなってパパとつ
ないだてをもっと、もっとおおきくふった。

「とも、どうしたの。」

パパがきいた。

「なんでもないよ。」

わたしはわらってパパにいった。

ずっとつづくほそくながいはにゅうのみち
をかぞくでおさんぽ。たのしいひ。

奨励賞

かわっていくぼくの住む町

須影小学校 五年

江原 清眞

「ホタルがいなくなつたなあ。」

「イナゴもぜんぜんいないね。」

おじいちゃんとおばあちゃんが
少しさみしそうに言つた

「すっかりかわつてしまつたよ。」

何ひとつわからなかつたぼく

ぼくの生まれる五年前にできたイオン

両はじが田んぼの通学路を

猛スピードで毎朝走りぬける車

登校指導をしながら

「気をつけるんだよ。」

おじいちゃんとおばあちゃんの

毎朝の口ぐせになつた

この道をイオン通りとよぶという

用水の魚もザリガニもへつてきた

「買ひ物は楽になつて良かつたけれど…。」

自然が少しづつへつていくぼくの町

二年前にできた愛藍タウン

歩いて買ひ物ができるたぐさんの店

「便利になつてよかつたー。」

ぼくが じまんげに言うと

おじいちゃんとおばあちゃんは

少しだけがっかりとした顔に

れんげ畑で首かざりを作つたり

自然の中で走りまわつたこと

ぼくには 何ひとつわからない

楽になつてよかつた

ぼくはそう思つていた

かわつてほしくないものもたぐさんある

健康を守つてくれる地いきに伝わるもの

たぐさんの大切な行事や自然

夏祭り、七夕祭り 輪くぐりなど

かわつていく中でも

いつまでも

守つていきたいなぼくたちの手で…

あいのまち

村君小学校 六年

佐久間 祐子

羽生市は藍染のまち

江戸時代の後半から始まり

藍を使った染め物屋さんが

むかしは二百軒以上あつたらしい

わたしの家も

昭和の始めごろまで

染め物屋だったと祖父が言う

近所の人たちからは

いまでも屋号で

紺屋こうやの家とよばれている

祖父が子どもの時は

藍がめのあとが

残っていたという

わたしと藍がこんなに

身近だったなんて

おどろきだ

藍の色はふしぎな色

緑色に染まった染め物は

あつという間に藍色になる

藍の色は深みのあるやさしい色

使つていくと色がなじみ

色の変化を楽しめる

歴史のある藍が

魅力のある藍が

羽生で有名なことを

わたしは誇りに思う

藍染の文化を引き継いで

これからもずっと

あいのまち羽生であつてほしい

大好きな野球

三田ヶ谷小学校 四年

高瀬 遥斗

ぼくは野球が好きだ

バットに当たってカキーンとなる音

フライを取ってバシツとなる音

スライディングした時のズザツと土をけずる

音

みんなで「ガンバレー。」とおうえんしている

声

練習が終わった後の「あつしたー。」と言う声

いろんな音や声がグラウンドにあふれている

六年生は野球がやっぱりうまいなあ

今のぼくには、ぜんぜんかなわない

だから、練習が終わった後に一人ですぶりを

する

ブンブンブンブン

ブンブンブンブン

「がんばってるね。」

近所の人もおうえんしてくれる

ブンブンブンブン
ブンブンブンブン

弟もいっしょにすぶりをしてくれる

弟も野球が好きみたい

来年はいっしょにキャッチボールができるか

な

早くレギュラーになつて

「カキーン。」とホームランを打つてみたいな

うちのおもち

三田ヶ谷小学校 二年

萩原 実和子

さむいさむい年まつの
かぜがビュービューふくその日
かぞくみんなでおもちつき

つめたいつめたいお水
おじいちゃんの手はまつかつか
といだもち米水の中
おふろにつかっているみたい
さあ、おもちつきがはじまるぞ
木をばってんにならべたら
わたしの心も火もいっしょにおどりだす
うちわであおいで木をくべて
わたしは火の番人だ
ほのおはゆらゆらもち米シューシュー
むしたお米はうれしそう
さあ、おもちにへんしんだ
ついたおもちを丸めるよ

あついあついおもち
おじいちゃんの手はまつかつか
丸いおもちに四角いおもち
あんころもちにからみもち
赤いほっぺで食べる白いおもち
みんなの顔はえ顔でいっぱい
わたしもみんなもうれしいな
また来年が楽しみだ

ねこのしっぽ

羽生南小学校 三年

矢吹 優

ぼくのうちには、ねこが二ひきいる

「ふう」はちよつとこわがりなねこ

「らい」はあまえんぼうなねこ

もふもふでとつてもかわいい女の子

ふうとらいは話せないけれど、ぼくは気づいたんだ

しっぽのサインに

しっぽがピンと立っているとき

ごはんのまえや、ぼくたちが帰ってきたとき

これはうれしいのサイン

しっぽがダラーンと下っているとき

おこられたり、遊んでもらえなかったとき

これはかなしいのサイン

しっぽがポワーンとふくらむとき

二ひきでけんかをしたり、おどろいたとき
これはいかくともわいのサイン

しっぽをバンバンとゆかにぶつけるとき
ねているときにさわったり、じゃまをしたとき

これはいらいらのサイン

しっぽを大きくブンブンはよろこびのサイン

しっぽの先だけをクネクネはたのしいのサイン

しっぽをクルンと体にまきつけているときは
おだやかなサイン

ねこのしっぽは、気もちのサインだ

その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
ふた子のぼくたち	羽生南小学校 三年	梶原 莉咲
大好きな図書館	羽生南小学校 六年	神山 夕海
「ふるさとの詩」	村君小学校 五年	川田 真衣
ぼくのかぞく	新郷第一小学校 一年	木村 太生心
元気をもらえる花	三田ヶ谷小学校 二年	木村 風雅
ぼくの顔はカラフル	新郷第一小学校 三年	高野 陽太
みんなの笑顔を作るには	新郷第一小学校 五年	関根 玲苒
ぼくたちのアゲハチョウ	川俣小学校 三年	田口 優馬
ぼくのお気に入りの場所	羽生南小学校 五年	棚橋 勇太
おばあちゃんのすいか	村君小学校 三年	ほそい みゆ
じいちゃんのまほうの手	村君小学校 三年	みえだ まな

◎中学生の部

太田玉茗賞

母の運転

東中学校 一年

西野 嘉人

母は 車の運転が苦手だ
角を曲がる時 母に話しかけてはいけない
駐車場でポツンと離れた所に車を駐める
ショッピングモールやスーパーで買い物
をした時 車までとても遠い
車を一回で駐められない
何度も左右にハンドルを回し 前進と後退
を繰り返す
一時停止で 左右の確認をし過ぎて 後続
車にクラクションを鳴らされることもある
雨が降っている夜 私は無意識にシートベ
ルトを握り締めてしまう

母は十年前 羽生市に引越してから 本格

的に車を運転するようになった
未だに父が助手席 母が運転席に座り 父
が

自転車の注意！

歩行者が横断するよ！

と言いつつ 母は気を付けながら運転している

四月から 自転車で中学校に通うようにな
った

車道を自転車で走る怖さを知った

雨の日 もっと近くに車を駐めて欲しい

急ぎだから 一回で車を駐めて欲しい

クラクションを鳴らされるなんて 恥ずか
しい

母に言ったことを後悔した

母は 家族のため 生活のため 交通ルー
ルに気を付けながら 苦手な運転を今日も
している

宮澤章二賞

僕の頂

南中学校 一年

関根 伶

僕は山に登る

一歩一歩 山道を進む

なだらかで景色が大きく開ける道

一見平坦に見えるが ひよっこり飛び出た

石に足を取られて

転びそうになってしまう道

足をふみしめて登らなければ

すべり落ちてしまう急勾配の道

大きな岩が これでもかと行く手を阻む道

「登りきった」と喜んだ先に

まだまだ続く登山道

山登りは入念に準備をして登るルートを

確認し決めたルートを進む

もし登山道から外れ 道を見失えば

遭難してしまうことだってある

人生は登山に似ていると聞いたことがある

けれど 僕はまだ 自分の進む道

進んで行きたい山道が どの道なのかも

決まっていない

目指すゴールに向かう道を地図で確認する

ことは出来ない

最短で安全な山道を事前に知ること

誰かに聞くことも出来ない

でも目の前の山は登ってみたい

登る前に準備は出来る

もっと広く遠くまで見渡せる無限に広がる

景色を見てみたい

そして また続く山道を見つけ

自分の足で登り続ける

僕の頂はどこにあるのだろう

いつたどり着けるのだろうか

雲に隠され見えない僕の目指す頂

いつか快晴の空に広がる僕の頂に

胸を張って自分の足で立てるように

優秀賞

祖母が教えてくれた事

南中学校 一年

古溝 将大

僕の家には畑がない
だから僕は祖父母の家に行
くのが好き
畑の中にはたくさんさんの学
びがある
祖母はスイカやかぼちゃの
花粉のつけ方を教えてくれた
畑で採れた物を
その場で食べさせてくれた
花や生き物の名前も
教えてくれた
色々な事を知っていて
わからない事を聞くと
すぐに教えてくれた
とにかく祖母は物知りだった

そんな祖母が
よく話していた事がある
利根川の昭和橋から見ると
夕焼けの景色が一番好きだと
その理由は川がキラキラ輝いて
気持ち落ち着くからと言っていた
利根川は季節によって
色々な表情を見せてくれる

今は祖母はいないので
悲しいけれど
昭和橋から利根川の夕日を見ると
大好きな祖母の笑顔を思い出す
僕はこれからもずっと
心の中にいる
祖母と一緒に
生きていきたいと思う

曾祖母と私の夢

西中学校 三年

古谷 美結

曾祖母が倒れた

救急車で病院へ

二回目の脳梗塞

麻痺が残った

突然の車椅子生活

元気だった曾祖母は介助が必要となった

「家で看たい」

祖母が言った

反対する人は誰もいなかった

曾祖母の介護が始まった

介護士の祖母と看護師の母は手慣れていた

祖母が作った食事を

左手でスプーンを使って食べる曾祖母

慣れない左手での食事

すぐ疲れてしまい食べるのをやめてしまう

母が介助する

美味しそうに食べる曾祖母

「コーヒー飲みたいな」

食べ終わると必ず言うセリフ

美味しそうにコーヒーを飲む曾祖母

母は食べ終わると曾祖母を部屋へ連れて

口腔ケアを行う

車椅子からベッドへ

オムツを替える

毎日毎日行っていた

曾祖母は天国へ逝った

長年過ごした家で

みんなと共に暮らせた曾祖母は

幸せだっただろう

家族の力に感動した

そして、私の夢への思いが強くなった

私の相棒

西中学校 二年

森田 有紀

私の相棒

トロンボーンとの出会いは
中学一年の春だった

吹奏楽部に入部して
どの楽器にしようか

私は迷っていた

その時君と

目が合った気がした

メロディラインではないけど

リズムをとって支えている

なくてはならない

花で例えると根のような君に

私はとてもひかれ

そして相棒に決めただ

スライドを動かして

音を奏でる

自分の感覚でポジションを

見つけて音程を合わせる

ちよつと練習をサボると

プンって黙ってしまう

たくさん練習すると

私に合わせて一緒に歌ってくれる

知れば知るほど愛おしい

なくてはならない存在になったんだ

これからの中学生生活も

楽しく過ごしていくために

おつきあいください

たくさん思い出を

一緒に作っていきましょうね 相棒

奨励賞

弾んで 響く ボールの音

西中学校 一年

関根 琉聖

「タタン タタン タタン タタン」

中学校で卓球部に入った

「タタン タタン タタン タタン」

体育館に響くラリーの音

先輩達のラリーの音は

「タタン タタン タタン タタン」

卓球を始めたばかりの僕の音は

「タン タン タン」

新しい僕のラケット

まだ上手に音がしない

どうしたら あんなふうに打てるのか…

先生や先輩たちが教えてくれた

「ラケットを水平に 打つ前のラケットを
少し上向きで」

言われた通りやってみる

「タン タン タン」

まだ上手くいかない

だけど 楽しい

先輩が打つ

僕が返す

僕の意識がボールへと集まっていく

「タタン」

「タン タン タン」

「タタン」

「タタン タン タン」

少しずつ 少しずつ長くなっていくラリー

来年の今頃には 僕も上手になっているの

だろうか

優しく教えてくれた先輩達のように

後輩に教えられるだろうか

自分が教えてもらったように

「タタン タタン タタン タタン」

体育館に響くボールの音

僕の心がはずむ音

祖父と手打ちそば

西中学校 一年

野村 健太

八月十三日、今年もこの日がやって来た迎え盆。

毎年家族で祖父を迎えに行く。

祖父との思い出はたくさんあるが、一番の思い出は、祖父と一緒に手打ちそばを作った事

僕がまだ小さい時に、いつも祖父のとなりでそば打ちのまねごとをしていた。

僕が作ったそばも祖父はゆでてくれて、そのそばを祖父は「おいしい」と言って笑っていた事をつい最近の出来事のように思いだす。

また祖父の手打ちそばが食べたくなくなった。

今年は、僕の手打ちそばをお供えした。

「おいしい」と笑いながら食べてくれるだろうか。

僕は、いつまでも祖父の事を忘れない。

大好きだった祖父の事を。

いつまでも僕の心の中に。

送り盆のけむりに乗って帰って行った祖父の事を。

真夏の激闘

東中学校 一年

蓮見 日菜乃

夏が来た

いろいろな生き物の成長期
外に出ると

たくさんの命がはしゃいでる

バツタにカエルにくもにカマキリ

いきなり出て来て

驚くこともあるけれど

ゴムボールみたいにはねている姿は

なんだかとってもおもしろい

部活が終わった帰り道

突然「それ」は現れた

とっても小さい子供トカゲだ

私はつかまえたくなかった

理由は分からなかったが

なんだかとてもつかまえたかった

それはみんなも同じだった

「カーン」と

戦いの始まりを告げるゴングがなった

いつせいにつかまえようとしたり

回り込んだりしたけれど

それでもトカゲは速かった

一本のひものようにスルスルと抜け

全員の攻撃をかわしてしまった

抜け落ちたばかりの黄緑の葉に

トカゲは隠れて見えなくなった

戦いは終わった

みんな肩をがっくりおとした

こんな暑い日でも

トカゲは生きる

逃がしてしまつて残念だけど

それもまたいいなと思った

いろいろな生き物が

生まれ

育ち

大人になる

そんな自然豊かな羽生を

私はずっと

大好きだ

桜とともに

南中学校 三年

福田 彩陽

桜の香りが優しく包む春
新学期が始まる春
新生活が始まる春

それぞれの春を後押ししたい
そんな思いで太鼓を叩く
さくら通りで太鼓を叩く
心地よいリズムで太鼓を叩く
てれすくてん てれすくてん

羽生に響くこの音が
心に響くこの音が
私が叩くこの音が
誰かの心に残りますように
てれすくてん てれすくてん

羽生で続く伝統が
大切にしたい伝統が

残していきたい伝統が
誰かの心に伝わりますように
てれすくてん てれすくてん

さくら祭りで叩く太鼓には
羽生を想う 故郷を想う
そんな思いを込めている
みんなの心が温かくなりますように
てれすくてん てれすくてん

桜の花びらが舞い散る春
太鼓の音が響く春
羽生を想う大切な春

二つのふるさと

西中学校 二年

横山 遼斗

僕には家が二つある

一つは今住んでいる家

もう一つは僕が二才の頃まで住んでいた
福島の家

震災のときに住んでいた家だ

まだ小さかったし、もちろん覚えていない

昨年の冬、震災後初めてその家を訪れた

昔遊んでいたおもちゃ

庭のブランコ

その全てが

まるで時が止まったように残っていた

母は泣いていた

祖母も悲しそうだった

ただ僕だけは思い出せなかった

じっと見つめているだけだった

あれから十一年

僕の記憶には残っていないが

大切にしたい、もう一つの故郷だ

その他の良い作品

作品は羽生市ホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
ドキドキ ワクワク	西中学校 二年	梅田 聖玲音
言葉と共に	西中学校 三年	大塚 柊之介
僕のオアシス	東中学校 一年	木村 悠聖
夏の知らせ	西中学校 一年	白石 壮
私のひいおばあちゃん	西中学校 二年	杉浦 彩華
あの校庭	西中学校 一年	長野 真緒奈
中学校へのいきごみ	西中学校 一年	野田 彩瑛
背比べ	南中学校 一年	橋本 その
自然の音楽隊	西中学校 二年	濱崎 仁一路
私の部屋から始まる一日	西中学校 一年	深井 美緒
木陰	南中学校 三年	藤倉 叶望
改革の夏	西中学校 三年	山口 道

第十八回 小中学生「ふるさとの詩」募集要項

利根川の流に生まれ、四季おりおりの美しい自然に恵まれた羽生市は、日本の近代詩史に名をとどめた、太田玉茗や田山花袋の小説『田舎教師』のふるさとのまちです。

また、羽生市出身の宮澤章二は、市内の多くの校歌を作詞した詩人です。

この二人を郷土の偉人として尊敬し、顕彰するためにも、みなさんの「ふるさと」を一篇の詩にして、応募してみませんか。

●募集作品

- ・ 「ふるさと」を題材とした作品、または自由題
(家族、友だち、自然、伝統行事など、心に感じたことを書いてください。)
- ・ 自作で未発表の作品(過去に書いた作品でも構いません。)
- ・ 応募作品数は一人1篇

●応募方法

- ・ 400字詰め原稿用紙B4縦書、表題・氏名・本文で2枚以内の作品。
- ・ 各学校で取りまとめ、名簿を添付のうえ提出をお願いします。

●応募資格

- ・ 市内の小学生・中学生

●応募締切

- ・ 令和4年9月6日(火)

●発表

- ・ 令和4年11月下旬に通知

●賞

- ・ 小学生の部・中学生の部
各部門とも、太田玉茗賞 1篇、宮澤章二賞 1篇、優秀賞 3篇、奨励賞 5篇
- ・ 賞状と盾を贈呈します。

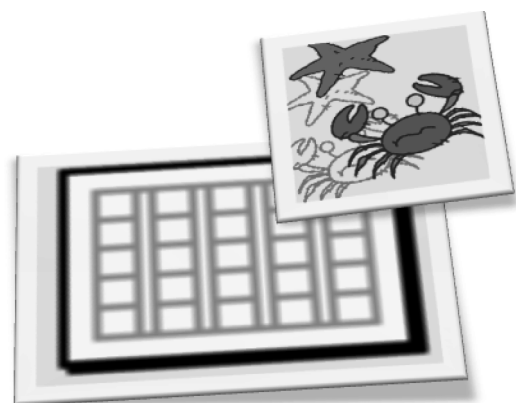
●その他

- ・ 応募作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却しません。
- ・ 入賞者の作品・氏名・学校名・学年については、広報及びホームページに掲載するほか、報道機関等に公表します。
- ・ ホームページには、過去の作品も掲載されておりますので、参考としてご覧ください。

●主催 羽生市

●応募・問合せ先

羽生市役所秘書広報課 〒348-8601 羽生市東6-15 Tel.561-1121(内線204)



●第十八回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部	277篇
中学生の部	217篇
応募総数	494篇

●選考委員（五十音順）

塩田禎子
根岸光子
萩原澄江
松村洋彦
水野栄子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 令和5年1月17日

